ZOCALO 2022 8 ▸ 9

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

作品の「死」を考える

アーティスト・プロジェクト#2.06 髙橋銑　いき、またいきるまで
2022年7月16日(土) ～ 10月2日(日)

現在活躍中のアーティストを紹介する「アーティスト・プロジェクト#2.0」(以下、A.P.#2.0)。2022年度は、新進気鋭のアーティスト・髙橋銑を紹介しています。作家と、本展企画者である松江李穂さんにお話を伺いました。

――「いき、またいきるまで」というタイトルには、どのような関心が反映されているのでしょうか。

髙橋　これまで、作家としての制作活動と並行して、彫刻作品の保存修復に携わってきました。色々な状態の作品と向き合うなかで、作品の破損という出来事は生と死という一回性のなかの、単なる乗換駅でしかないのではないかと考えるようになりました。生み出された作品を、「死」という言葉で閉じずに見てみたいという関心をここ数年抱いていて、それが今回の展覧会にも引き継がれています。

――松江さんは展覧会のキュレーションを担当しています。髙橋さんの企画を提案したのはなぜでしょうか。

松江　この企画は、私が2021年度に埼玉県立近代美術館に学芸員として在籍していた時にスタートしました。髙橋さんは、私がインディペンデント・キュレーターとして企画した展覧会※1にも参加しているのですが、制作や仕事、生活が複雑に絡み合う現実に自覚的な態度や、「人間とは何か」という普遍的なテーマに実直に挑む姿勢に興味がありました。A.P.#2.0では、作品制作と保存修復の仕事を並行する髙橋さんが、どのように美術作品や美術館を見ているのかを知りたかったです。

髙橋さんは元々保存修復の仕事をしていて、実は、アーティストとして活動する以前から美術館の活動に携わるという特異な経歴をもっています。髙橋さんにとって美術館は生活の基盤となるような場所なので、今回の展示が、アーティストのキャリアにおける美術館個展以上の意味を生み出すのではないかと考えました。

――A.P.#2.0で発表する作品について教えてください。

松江　保存修復の技法で人参に防腐処理を施した「Cast and Rot」シリーズと、人体をモチーフにした新作《Twins》を発表します。「Cast and Rot」は、いわゆる「死」というものが保留された状態として捉えることができます。かたや、2体の人体が交互に上下運動を繰り返す《Twins》は、当初「双子はいつ死ぬのか」というタイトルが付けられていたように、物理的にも概念的にも「死」へと向かっていくベクトルが作品の中に表れているように見えます。この対照的な2作品には、髙橋さんの「生」と「死」にまつわる考え方が反映されていると思います。

髙橋　対照的なベクトルを探るような方法がすごく好きなんです。振り返ると、対になっている作品が多いですね。例えば、日の丸国旗を描く場合、一番自然なのは白い紙に赤い丸を描くことです。逆に、赤い紙を白く塗りつぶしていっても、同じものができる。ひとつの問いについて考える時に、異なるふたつのアプローチをとることで、その問い自体の輪郭がくっきりと鋭利なものになっていくと考えています。

――髙橋さんの作品はコンセプチュアルな側面が強い印象がありますが、最近少しずつ制作の方法が変わってきていると伺いました。

髙橋　去年「Cast and Rot」のシリーズで個展※2をやったときに、形をつくる時間、手を動かす時間が好きなのだと気づきました。自分の手に馴染む素材で形をつくる時間が長くなってきて、作りながら考えるというスタイルを取るなかで、形というものに対してストイックな関心が出てきました。今までそういう作品の作り方をしてこなかったので、これからゆっくり取り掛かろうと思っています。

(聞き手:S.S.)

※1　「一歩離れて／A STEP AWAY FROM THEM」(ギャラリー無量、2021年)
※2　個展「CAST AND ROT」(LEESAYA、2021年)

上：「CAST AND ROT」展示風景 (LEESAYA、2021年) Photo by ICHIRO MISHIMA
左：《Cast and Rot No.1》2019年 Photo by KEIZO KIOKU
右：《人間がニンゲンになるとき》2019年 (参考画像)

髙橋銑(たかはし・せん)
1992年東京都生まれ。2021年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了。
主な個展に「二羽のウサギ／Between two stools」(The 5th Floor、2020年)など。

田中保へのアプローチ ― 大久保静雄・元学芸員インタビュー ―

企画展「シアトル→パリ　田中保とその時代」
2022年7月16日(土) ～ 10月2日(日)

10月2日まで開催中の「シアトル→パリ　田中保(やすし)とその時代」。その土台となったのが、当館で過去に開催した2回の企画展です。当時の担当学芸員であった大久保静雄さんに、思い出などを伺いました。

――「1920-30年代　ラプソディ・イン・パリ　田中保をめぐる画家たち」(1988年)について教えてください。

本間正義館長(当時)の提案で開催された企画展です。田中保の知名度がまだ低かったため、田中のパリ時代に焦点をあて、当時パリで活動していた他の画家たちを加えて構成することになったわけです。

ところが、田中保についての資料や情報が少ない上、制作年不詳の作品が多いのに困ってしまって。少しでも田中の生きた時代を知るために、アメリカの無声映画特集を見に行ったりしましたね。こうした暗中模索の中、田中を支援した塩田良温氏のご子息である塩田良興ご夫妻に貴重なお話を伺うことができたことは、田中研究の大きな支えになったと思います。田中家の七男、田中一(けい)氏の長女である田中幸子氏からは、田中保の少年時代のかけがえのないエピソードを聞くことができました。

展覧会終了後、本間館長の提案で「田中保研究会」を立ち上げたんです。田中保を何とか埼玉から発信したい思いがあったのでしょうね。その後、読売新聞社の美術館連絡協議会で実施していた海外派遣に応募し、1991年から92年にかけてシアトルとパリで調査しました。

――海外派遣ではどんな調査をしたのですか？

シアトルでは、画家のポール堀内氏と彫刻家のジョージ蔦川氏にお世話になりました。両氏を介して地元の美術史家の方から助言をいただき、大学や図書館で効率的に調査することができました。シアトル図書館の人たちの親切な対応も忘れられません。

パリでは、ポンピドゥー・センターの資料室で、サロン・ドートンヌほか4つのサロンのカタログから田中の出品歴や図版の有無等を調査しました。コピー機の前で順番を待ち、ひたすらコピーする作業を幾日も続けたものです。

田中保の死亡地を確認するために、パリ6区の区役所にも行きましたね。終焉の住所が分かったので、バスで行ってみたところ、そこがネッケル小児病院でした。事実はつかめたのですが、さすがに辛く、空しく、寂しい気持ちでバスに乗って帰ったことが忘れられません。

最も貴重な思い出は、田中保夫妻が住んでいたアトリエ内部を見ることができたことです。そこにはあるご夫婦が住んでいたのですが、見ず知らずの日本人を部屋に入れ、写真も撮らせていただき感謝の言いようもありません。内部は住人の趣味で装飾されていましたが、建物の構造は昔のままで当時の雰囲気をつかむことができました。

――その成果が「画家タナカ・ヤスシ　シアトルとパリにかけた夢」(1997年)に繋がるわけですね。

海外調査によって田中保の全体像が見えてきて、やっと田中が没するまでの足跡を紹介できるようになりました。それに加えて、田中保の収蔵作品点数も急増していました。東京の画商から90点近いオファーがあり、田中幸人館長(当時)と検討して、一気に収蔵の運びとなったのです。

この展覧会で圧巻であったのは、《アトリエ》という作品を展示したことです。とにかく床から天井近くまでの大作であるため、山領絵画修復工房にお願いして、ロール状のカンヴァスを壁に直接展示しました。田中のアトリエ内の情景が描かれているのですから貴重ですよ。あの作品はいまどこにあるのか気になります。

――それは実物を見てみたかったです…。今回の企画展は、大久保さんの研究成果なしでは実現できませんでした。惜しみないご協力をありがとうございました！

(聞き手:S.A.)

左：田中が描いたサン・ベネゼ橋。南仏アヴィニョンにて
中：田中保《サン・ベネゼ橋》1928年頃 埼玉県立近代美術館蔵
右：パリ、ポンピドゥー・センター資料室にて